

S28b 2型セイファートの可視近赤外偏光分光

渡辺 誠、中屋秀彦(国立天文台ハワイ)、佐藤修二、長田哲也(名大理)、J.Hough(Hertfordshire 大学)

2型セイファート銀河では、ダストトーラスにより隠された中心核の連続光と広輝線領域からの輻射が偏光した成分として見えていることは良く知られている。その偏光メカニズムは、紫外域から可視域については、Electron 散乱が支配的と考えられているが、近赤外域では、まだはっきりとしていない。

我々は、可視から近赤外域にかけての偏光メカニズムを調べるために、名古屋大学で開発した可視赤外同時撮像分光観測装置 TRISPEC を用いて、2型セイファート銀河4天体 NGC 1068, Mrk 463E, Mrk 1210, NGC 4388 の偏光分光観測を行った。そして、偏光モデルとして Young et al. (1995) によるダストのダイクロイックによるモデルとダストトーラスでの散乱によるモデルの2つを考え、観測された偏光スペクトラムとの比較を行った。その結果、ダイクロイックによる偏光モデルの方がより観測データに合うことが分かった。